

アポロという人がいました。今日の聖書個所で初めて登場してくる人物です。彼はアレクサンドリア生まれのユダヤ人でした。アレクサンドリアというのは、エジプトにあった都市なのですが、新約聖書の時代に人口がすでに百万を超えていたという当時の巨大都市、世界最大の商業都市でした。ここにはエジプト人、ギリシヤ人をはじめ、多くの外国人が住んでいて、ユダヤ人たちも多く住み、ユダヤ人の共同体がありました。ヘブライ語で書かれた旧約聖書が当時の世界の共通語であったギリシヤ語に翻訳されたのもこの地でありました。アレクサンドリアは当時の世界の文化の中心地のひとつでした。有名なアレクサンドリア図書館が当時この都市には建てられており、世界のさまざまな書物が集められた、知の宝庫でした。

アポロはそのような環境の中で育ち、聖書に詳しく、雄弁家だったとあります。聖書に詳しいというのはもちろん旧約聖書に精通しているという意味で、雄弁家というのはしゃべるが上手ということではなく、学問のある、学識のあるという意味の言葉です。つまりアポロはギリシヤ語を母語としつつ、ヘブル語聖書にも精通していた、教養人、知識人でした。彼は聖書に親しみ、主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていた、というのです。主の道を受け入れ、という言葉は、神を信じる生活を生きて、という意味で、しかもイエスのことも聞き及んでいたのでしょう。イエスのことを熱心に詳しく語る人だった、というのです。けれど驚くことにそれほどイエスのことを語っているアポロなのですが、ヨハネの洗礼しか知らない人だった、というのです。

ここには何も書いてありませんが、類推すると、彼はアレクサンドリアのユダヤ人の中の洗礼者ヨハネの弟子筋だったのかもしれませんが。したがって、イエスのことは、尊敬すべき預言者、優れた宗教者としてとらえていた、ということになります。アポロがヨハネの洗礼しか知らない、ということは、イエス・キリストによる洗礼を知らない、ということです。

ヨハネによる洗礼というのは、あなたの生き方を悔い改めなさい。神さまの前で驕ってはならない。謙遜になって神の前でいかに自分が罪人か、いかに神のみ旨に應えていないかわきまえを知って、反省して、心を入れかえて、真摯に

生きなさい、という悔い改めるしるしとしての洗礼です。心の出直し。それがヨハネによる洗礼です。ということは、アポロはイエスをしっかりと見つめて、いかに自分がイエスの愛の精神からかけ離れているか、悔い改めてイエスの愛の精神に生きなさい、神を愛し、隣人を愛していきなさい、と語っていたのではないか。

アポロはそれが洗礼者ヨハネの衣鉢を継ぐことになると思っていたのではないか。しかしことはそう単純なことではない。イエス・キリストによる洗礼を知らない、ということは福音を宣べ伝えるものにとって、決定的なものが欠けている、ということです。アポロがユダヤ人の会堂で大胆に語っているとき、一組の夫婦が、彼を見つめ、彼の話に聞き入っていました。プリスキラと彼女の夫アキラです。二人は彼を招いてと訳されていますが、わきに呼んで、もっと正確に神の道を説明した、というのです。聞きすごすことができなかつた、ということです。福音でないものを語っている、ということです。

イエス・キリストによる福音は、ヨハネの洗礼の延長線上にあるものではなくありません。反省して心を入れかえて、神に向かって歩んで行け、というような話ではない。そんな自己努力で何とかなる問題ではない。人間の救いは、人間の手ではどうにもならない。それゆえにこそ神は独り子を遣わされたのです。イエス・キリストの十字架と復活、それは全く神のなされた業です。神の働き給う業。十字架は人間の知恵では愚かなものとしか見え、復活もまた人間の知性では荒唐無稽なこととしか受け取れないことです。しかしそれこそ神が人間の救いのためになされた業であり、人間は十字架と復活の恵みによって救われ活かされ、新たに歩みだしていける。キリストの福音とはこの神の業である十字架と復活の中に自分があることです。そしてキリストによる洗礼とは、まさにキリストの福音につながる洗礼なのです。

アポロがそのことを知らずにイエスを熱心に語っていた、ということは、どんなにイエスを詳しく語っていたとしても、それは不十分ではなく、福音ではないものを語っていた、ということです。

アポロは学識も教養もある人だった。旧約聖書にもよく聞く人だった。そしてイエスのことも知っている人だった。しかし、イエス・キリストの救いの中にある自分をいまだ知らない人だった。

アポロにそのことを明らかにし、福音を説いたのは、プリスキラとアキラでした。プリスキラは女性。彼女は夫であるアキラと共に、テント職人として働きつつ、パウロの協力者としてパウロの働きを支えました。

しかし、二人はパウロを助け、教会の歩みを支えた、ということにとどまらず、アポロが語る話を聞いて、それがたとえどんなにイエスについて熱く語り、大胆に、詳しく語るものであって、福音から逸れているものなら、それは福音とは違う、ということのアポロに伝えることができた、という働きも担っているのです。ルカはこのことをとても短くさりと書いています。しかし、じっさいはさりとではないのではないか。デリケートで難しいことですよ。考えてみてください。プリスキラとアキラとは、テント職人だったのです。特別教養があるとか、まして学識がある人というわけではなかったでしょう。一方アポロは、学識のある人だった。そのアポロに何の銜いもためらいもなく、あなたの語っていることは福音の核心ではない、そう批難ではなく、忠言・忠告することができる、これはすごいことです。

プリスキラとアキラ、以前も言いましたが、当時は普通は男性から名前を書く。男性だけ書いて、その妻と書くことが多かった。あるいは妻のことなど書かない、そういう時代です。しかしルカはここで妻であるプリスキラからその名前を書く。なぜか。彼女が積極的に、より確かに福音を語り、アポロに対して、キリストによる洗礼について詳しく語ったからでしょう。パウロたちの間で、プリスキラの福音に聞いて生きる確かな歩みが周知されていたからでしょう。

二人がアポロをわきに呼んで、あなたの語っていることは福音とは違う。これが福音だ、と語ることができた理由は明確です。二人がその福音によって生きていたからです。キリストの福音を自分の心、体、生活で聞き、生きていた。それだけ。その福音によって生き活かされているからこそ、いくらキリスト教的小話のお話のように聞こえても、違うものは違う、と言えたのです。旧約聖書をどれだけ読み込んでいても、キリスト教らしき知識や教養があっても、イエスのことをどれだけたくさん詳しく語っても、福音でないものは福音でない、と言えたのです。しかもそれを心の中で思うだけでなく、アポロのために、あなたが語っていることは福音ではない、と告げることができた。それこそまさに、キリストの十字架と復活に生かされているものの歩みです。十字架と復活の福音、そしてその福音へとつながれるキリストによる洗礼へとアポロを導くことが、アポロに対する一番大事なかわりだ、とこの夫婦が感じていたからです。だから、二人は外連味なくアポロに語っているのです。

アポロはこの夫婦に導かれ、イエス・キリストの福音を受け、生きるものとなりました。彼はアカイア州に向かい、そこで聖書にもとづいて、救い主はイエスであると公然と証し、力強い語調でユダヤ人たちに福音を語ったのです。

ここには、福音の伝播があります。プリスキラ・アキラがどこでキリストの福音に出会ったかは使徒言行録には書かれていませんが、いずれにせよパウロとの出会いの中で、二人はいよいよ福音に生きるものとなりました。二人はいわゆる「伝道者」ではなかったでしょうが、生活者として、福音に生きる者となっている。そして必要な時には、自分の言葉で福音を語る人になっている。キリスト者の原型、と言ってもよい夫婦です。このようなリレーが起こっていくのが、福音の伝播です。そしてキリスト教会はそのような伝播の中で、二千年にわたって、福音が語り継がれてきたのです。

今日、朗読された最初の部分には、ガリオンという地方総督の話が記されています。そしてその後には、パウロの伝道の旅の行程が報告されています。コリントからエフェソへ、そしてエフェソから船にのってカイサリアへ。そしてエルサレム、アンティオキアに。さらにそこからガラテヤ、フリギアへといわゆるパウロの第三回の伝道旅行がここから始まっていきます。

福音を宣べ伝える旅は、拘束、訴訟、投石、牢に投げ入れられたり、過酷な経験も繰り返されていく。しかし福音を宣べ伝える旅において、福音に共に聞く友が与えられ、同伴者が与えられ、共に労苦を担うものが与えられ、福音の伝播が生まれていく。それはいいことも悪いこともある、ということではないと思います。何がいいことで悪いことかもわたしたちによくわかるわけではない。大事なことはわたしたちの生活の中で、何を聞き、何によって生かされ、何を語って生きるのか、ということ。わたしたちは使徒言行録に登場する一人一人のキリスト者を通してその大事なことと確かに向き合うように、静かに深く促されているのです。